人生の主

（第5のしるし：水の上を歩き弟子を救うイエス）

ヨハネ福音書6:16-21

【新改訳2017】

6:16 夕方になって、弟子たちは湖畔に下りて行った。

6:17 そして、舟に乗り込み、カペナウムの方へと湖を渡って行った。すでにあたりは暗く、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。

6:18 強風が吹いて湖は荒れ始めた。

6:19 そして、二十五ないし三十スタディオンほど漕ぎ出したころ、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て恐れた。

6:20 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」

6:21 それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。すると、舟はすぐに目的地に着いた。

（6:20）ギリシャ語・英語／行間訳

ὁ	δὲ	λέγει	αὐτοῖς,	Ἐγώ (エゴー)	εἰμι, (エイミー)	μὴ	φοβεῖσθε.
~	But	He said	to them,	" I	am;	do not	be afraid."

【祈りながら考えよう】

（１）ガリラヤ湖はどうして突風が起こりやすいのですか。どのような地形ですか。

（２）五千人の給食の奇蹟の後、なぜ強風の嵐を経験しなければならなかったのですか。

（３）「わたしだ。恐れることはない」とのみことばの「わたしだ」はギリシャ語原文によればどういう意味ですか。

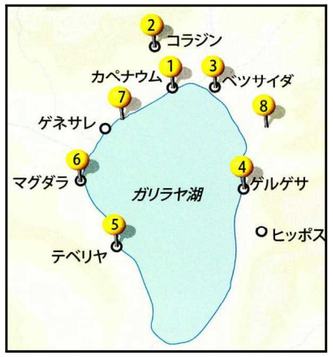
【解　説】

（１）五千人の給食の後、舟でカペナウムの方へ

《夕方になって、弟子たちは湖畔に下りて行った。そして、舟に乗り込み、カペナウムの方へと湖を渡って行った。すでにあたりは暗く、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった》（16-17節）

五千人の人々にパンを食べさせる奇蹟をされてから、人々が主イエスを王にしようとしたのを知られて、主はただひとり山に退き、そこで祈りの時を持たれた。一方、弟子たちは舟でそこからカペナウムに向かった。

ところが、主を乗せないままで漕ぎ出したその舟は、湖上に吹いてきた強風のため、立ち往生してしまった。



地点⑧から地点①カペナウムに向かう

（２）すり鉢状のガリラヤ湖

《強風が吹いて湖は荒れ始めた》（18節）

ガリラヤ湖は海面下二百メートルの所にあって、周囲が山で囲まれているため、「すり鉢（ばち）」になっていて、時々突風が吹いて来ることがある。この時も、そうであり、そうなると、元漁師をしていた者たちでも、どうすることが出来ず、漕ぎあぐねて、舟は波間にただようばかりであった。

しかも日はすでにとっぷり暮れており、暗闇が一面を被っていた。さらに悪いことに、主イエスはそこにおられない。彼らは本当に心細かったことであろう。もう何時間も経っているのに、まだ4，5キロメートルの所にしか進んでいない。

これは、ちょうど無力で孤独な人生の戦いをしている人の姿のようである。どんな人でも、人間は全く無力であり、孤独なものである。大きな艱難が襲ってきた時、誰でもそのことをいやというほど感じる。他の人は何の力にもならず、孤独な戦いをひとりでしていかなければならない。主の弟子たちも、この時はそうであった。しかし、彼らはその後、どうしたか。

彼らが無力で孤独な戦いをしている時にも、風や波は容赦なく彼らの上に襲いかかっていた。しかも真っ暗闇の中で、彼らは手探りで、脱出口を求めなければならなかった。

驚く五千人の給食の奇蹟の後に、孤立、暗やみ、風、波、嵐、不安、危険へと。この変化は大変なものであった。しかし、主はそれを知っておられた。主がそれを定められた。

（３）キリスト者に必要な「試練」

「試練」は、キリスト者すべてが当然受けなければならない食物の一部である。それはキリスト者の受ける恵みが証明され、彼らが自（みずか）らの中にあるものを見出すための手段の1つである。夏ばかりでなく冬も、暑さばかりでなく寒さも、日差しばかりでなく雲も、すべてが、御霊の実（み）が実（みの）って熟するようになるために必要である。

私たちは本性的（ほんしょうてき）にこれを好まない。私たちは、穏（おだ）やかな天気で、ほどよい風の下（もと）に、キリストがいつもそばにいて下さり、日差しが顔に当たるような状態で、湖を渡りたい。しかし、このようにはならないこともある。「私たちをご自分の聖さにあずからせようとして訓練される」（ヘブル12:10）とされるのは、このような方法によるのではない。

アブラハム、ヤコブ、モーセ、ダビデ、ヨブは、すべて多くの「試練」を経験した人々であった。彼らの足跡を踏み、彼らの杯を飲むことに甘（あま）んじよう。深い闇に閉ざされた時には、置き去りにされたように思われるかもしれない。しかし本当は、私たちは決してひとりぼっちではない。

（４）イエスが湖の上を歩いて来られた

《そして、二十五ないし三十スタディオンほど漕ぎ出したころ、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て恐れた》（19節）

弟子たちは、4，5キロメートル（25ないし30スタディオン）ほど漕（こ）ぎ出していた。人間的な観点から見ても、彼らは大変な危険にさらされていた。

まさにその時、弟子たちが目を上げると、イエスが湖の上を歩き、舟に接近して来られた。

弟子たちは、湖上を歩いて自分たちの方に近づいて来られる主イエスを見て、恐れた。なぜ恐れたのか。

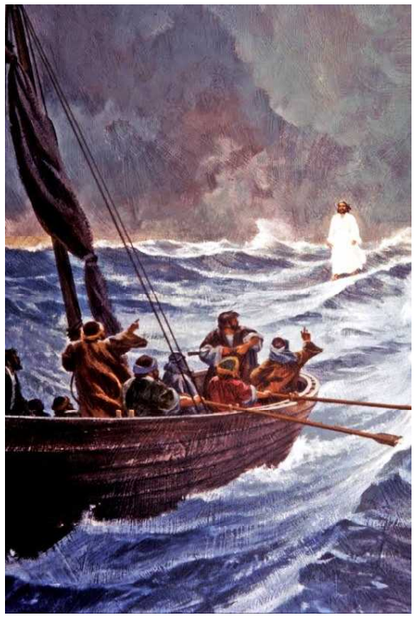
他の福音書を見ると分かるが、弟子たちは幽霊だと思ったからである。

彼らには、主イエスが単なる人間以上のお方であるということがまだよく分かっていなかった。

普通の人間が水の上を歩けるわけがない。しかし、主イエスはただの人間ではない。人間の姿を取ってこの世に来られた造り主の神である。

このお方が水の上を歩いたり、その他の奇蹟ができなければ、その方がむしろおかしいと言わなければならない。

主の弟子たちは、無力で孤独な戦いの中で恐れおののいていたが、それは、彼らに見る目がなかったからである。もしも彼らが主イエスを、単なる人間以上のお方として信じていたら、恐れる必要はなかった。



湖の上を歩いて来られるイエス

（５）わたしだ。恐れることはない

《しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」》（20節）

近づいて来られた主イエスは、恐れおののいている弟子たちに対して、「わたしだ。恐れることはない」と言われた。この「わたしだ」という言葉は、昔モーセからその名前を尋ねられた時、主が答えられたあの言葉と同じである。「わたしだ」ということばは、文字どおりには「わたしはある」（エゴー、エイミー）ということばである。

主（ヤハウェ）を表すこの名前をご自身に適用しているのは、ヨハネの福音書ではこれが2回目である。イエスは、あらゆる存在の根源であるお方、つまり造り主であり、同時に救いの契約の主であられるお方である。

このようなお方が近くにいるのであれば、恐れる理由は何もない。そもそもガリラヤ湖を造られたお方が、その波を静めることができるのは当然であった。

（６）すぐに目的地に着く

《それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。すると、舟はすぐに目的地に着いた》（21節）

弟子たちは、それが主イエスであるとわかると、イエスを舟に招き入れた。気がついてみると、ほどなく、彼らは目的地に到着していた。これもまたもう1つの奇蹟であるが、説明はされていない。